

# act 36

art, culture, tradition

【発行】札幌市教育文化会館

アクト第36号

November 2020



## 写真家／美術作家 クスミエリカ

現実の建物や風景、植物が大胆に組み合わせられ、幻想的な世界へと変容する。近年活動の幅を国内外に広げ、注目を集めるクスミエリカさんは、自身が撮影した写真にデジタル処理を施し、幾層にも重ね合わせる「デジタルコラージュ」作品を発表しています。今回は、札幌市教育文化会館をモチーフに制作した2作品をact紙上で初公開。多くの人を魅了する彼女の写真表現を紹介します。





「どんな世界にもなりうるステージ」から着想を得た作品。「多種多様な文化や世界に接続するハブとしての場所」をテーマに、札幌市教育文化会館で撮影した素材と、これまで撮りためた素材を組み合わせ、見事に幻想的な光景として表現。



PROFILE

Erika Kusumi  
クスミエリカ

1982年生まれ。北海道札幌市出身・在住。フォトグラファー、ウェブデザイナー、美術作家。自身が体験した“現実”を記録し、時間も空間も異なる写真を幾層にも重ね合わせ、デジタル処理を施した「デジタルコラージュ」作品を制作。写真以外の素材は一切使用せず、全て自身で撮影した写真のみを用いている。誰もが目にすることが可能な現実の風景を再構成することで、非現実な世界でありながらも、現実・日常の延長線上、あるいは平行線上に存在する世界であることを表現する。

# 写真を使って見方を変えることで、 現実も違う見方ができる。

— 令和2年度札幌文化奨励賞受賞おめでとうございます。

ありがとうございます。私が賞を頂けたのは、教文さんをはじめ、道内外のさまざまなジャンルの美術館、ギャラリー、またご関係者などからお声掛けいただいて、たくさんの方に広く楽しんでいただける企画に参加させていただいたからだと思っています。その機会をいただけたことで文化に寄与することができていたのだとしたら、とても嬉しいです。

— 今回actのために制作してくれた作品には、教文を撮ったものと、以前から撮りためていた素材が使われています。エリカさんが好きでよく撮るモチーフはありますか？

グッとくるモチーフはたくさんありますが、近年は面白い自然の造形や絶景と言われるような景色、建築物を比較的多く撮っています。植物や動物、特に鳥も好きでよく撮ります。今までは例えば東

京の商店街など人の暮らしがすぐそばに見える街の景色に惹かれていたのですが、今年は遠くに行けなくなった代わりに自宅近所を散歩がてらに撮影することが増えて、札幌の街並みに面白さを感じるようになりました。北国の建物のミニマムな感じが、今の自分の心情にフィットするのだと思います。

— 作品を制作する上でのテーマはなんですか？

「生と死」は、昔から変わらない大きなテーマです。相反するものが表裏一体であることが、現実の美しさだと思っています。それを一枚の写真で表すのは難しいけれど、組み合わせることで多面的に現実を見せてみたい。最近「生命力」に関心を持っています。疫病に向かって皆が一つにならなくてはいけない状況で、でもその中で分断が生まれるなど鬱屈とした雰囲気もある。ただそれは、生きることを皆がそれぞれ一生懸命考えているからだと思っています。生き方も含め、生命というものを今一度見つめ直し、きちんと

と向き合ってみたくて考えています。

— 制作過程で心がけていることはありますか？

美しくあろうとするルールを自分に課していません。撮影するときは世界の美しさに打ちのめされながら撮っているので、建物も風景も動物も、その美しさを尊重したい気持ちがあります。もちろん制作過程で素材を切り抜いて加工処理をして元のものとは全然違う形にすることもありますが、それはあくまで自分がその素材に対して感じる美や生命力を、より高めるためにすることです。

— 今年開催された本郷新記念札幌彫刻美術館の企画展では、札幌市民から写真を募って大きな作品をつくる共同制作プロジェクトも行いました。

人が撮った写真を使って制作するのは初めてのことで、自分では撮らないような対象や構図、色合いの写真がたくさん送られてきたことが面白かったです。と同時に、それは自分の思い通りにならないことを意味しますから、制作の過程ですごく苦労しました。応募してくれた人にとって大事な瞬間を切り取った写真を尊重しなかったで、バランス調整など最後の最後まで悩みました。でも逆に発見や刺激も多くて、このプロジェクトの後につくった自分の新作は、今までと全然違う作品になりました。

— さっぽろアートステージ2020で実施した子どもとの合成写真ワークショップも、記録すること

外の写真表現の楽しさが伝わる内容でした。

写真って、現実をより良く見せたり理想の形にしたりというように「盛る」ことができるんですよね。写真は現実により良く向き合うためのツールの一つで、大事な思い出を留めたいという気持ちの表れでもある。写真を使ってちょっと見方を変えることで、現実も違う見方ができるということを見せられたらいいなと思っています。

— 今後追求していきたいこと、やってみたいことはありますか？

常に過去の自分を超越していきたいと思って作品を制作しています。あと作品を見てくれた方が「この世界に入って探検している自分を想像してしまう」というような感想を話して下さることがあって、私自身「この世界に行きたい」と思って制作しているので、同じように思ってもらえることがすごく嬉しいです。そういう意味でも、見せ方の面で可能性はいろいろあるのではないかと考えています。せっかくデジタルでつくっているの、平面出力だけではなくデジタルならではの可能性を模索して、面白い世界をもっとつくっていったらいいなと思っています。

クスミエリカさんの作品ができるまで

## 圧倒されるような現実世界の美しさから、 別の美を纏う幻想世界を創り出す。

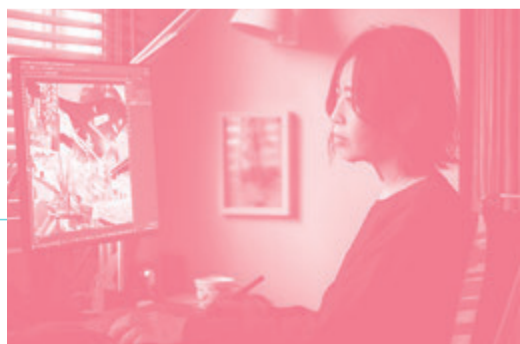
# 撮影

「もともと写真を撮ることが好きで、その延長線上で制作を始めたので、発見にあふれた撮影そのものが好きです」とエリカさん。撮影のためなら遠出も厭わず、旅のときにもカメラは欠かさず持参。



# 構成

作品のテーマと入れ込みたいモチーフを、連想ゲームのように言葉を書き出しながら考えていく。「テーマとオブジェクトの持つ意味が合致すると強度が出るので、追求していききたいです」。



# 合成

合う写真を探してラフに組みながら切り抜き、ひたすら重ねたり削除したりする作業と色調整など。「組み合わせるプロセスには、撮影とはまた違う自我を入れ込める楽しさがあります」。

## 入稿・出力

出力は業者さんをお願いするほか、自分で転写することも。写真がプリントされた複数枚のアクリル板が層状に配置されたシリーズなど、出力の方式から作品構成を考えるパターンも多い。

## PICK UP

過去作品の中からピックアップ。転機となった作品と同時期に制作した教文の音楽劇の宣伝美術作品には、意外な共通点が。

### カタルシスの浜

東京出張などで都市に向き合う時間が増えて建築物を多く撮影するようになった頃に制作し、転機となった作品。「何度も夢に見ている景色があるのですが、それをどうにか再現したいと試行錯誤してできた作品です」とエリカさん。本作で手応えを感じ、《カタルシスの浜》シリーズを制作。その後も「建築物とさまざまなものを組み合わせた空想の世界の構築」を追求することに。



### 札幌市教育文化会館主催 音楽劇『わが町』宣伝美術作品

《カタルシスの浜》シリーズを制作していたのとはほぼ同時期に手掛けた作品で、実はシリーズ1作目と同じ月の写真が使われている。制作にあたり、まず『わが町』の脚本を読みながらキーとなる言葉をピックアップし、そこから構成を決定。時計台や狸小路の写真は、構成を考えた後に撮影した素材。

### 次回出展情報

「札幌ミュージアム・アート・フェア2020-21」 予定

2020年12月19日[土]～2021年2月14日[日]

会場 | 札幌芸術の森美術館

